

2018 年度日本義肢装具学会海外研修印象記

Trent International Prosthetics Symposium (TIPS) 2019 に参加して

東京大学医学部附属病院 リハビリテーション科 藤原清香

2019年3月20日から23日の4日間にわたって英国マンチェスターで開催されたTIPS 2019に参加した。今回のテーマは「Moving beyond the Lab」で、研究室の成果をいかに臨床に活かしていくかという点で、臨床で直面する様々な課題の解決につながる研究発表が多かった。特に生体からの電気信号をいかに義手に伝え、操作するだけでなく、感覚のフィードバックや、脳がいかに新たな手となる義手を認識するのかという双方向の情報伝達と制御が、義手に関わる研究者にとって大きなトピックとなっているのを実感した。また海外複数メーカーで既存の電動ハンドとの互換性も備えた筋電信号のパターン識別型コントローラが商品化されManufacturers' Workshopも開催されていた。価格の課題は世界共通ではあったが、これからの電動義手の標準になるべくその優位性と有効性について、より質の高いエビデンスの研究が望まれると基調講演での議論もあった。

今回の会議の参加で印象に残ったのは、一つは英国内ではいくつもの名だたる大学の研究室が義手に関する研究をしており、スウェーデンやオランダなどを含めヨーロッパの研究者層の厚さを感じたことである。二つ目に義肢装具士・エンジニア・療法士・医師などが、1つのプロジェクトに集って義手の臨床研究を行う体制が重要であることだ。可能であれば日本からも若手研究者をチームで派遣し、最先端の情報の収集、海外チームと交流を拡充する海外研修助成が重要であると感じた。三つ目が義手に関する国際的な情報交換の場は、隔年開催のISPO、3年おきのTIPSとMECが開催され、義手の研究者は毎年情報交換のため集っているという事だ。TIPSは英国、MECはカナダの開催であり、義手の研究の中心は欧米であるという現実と、その両者から移動に片道12時間以上かかる日本は、その最先端の情報収集にすら大きな壁があることを実感した。日本の義手に関する臨床と研究がさらに盛り上がるよう、今回学んだことを今後に活かしていきたい。



壇上にて筆者の口演発表場面。

劇場がメインホールとなっており、口演発表はすべてこのホールで行われた。